

Road to 2027

仲道郁代 楽曲探求 対談集

<第1回> 2018年4月30日

I. ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第23番「熱情」へ短調 Op.57
仲道 郁代 × 平野 昭(音楽評論家)

II. モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第8番 短調 K.310
仲道 郁代 × 田辺 秀樹(ドイツ文学者)

III. ブラームス：ピアノ・ソナタ 第3番 短調 Op.5
仲道 郁代 × 西原 稔(音楽学者)

※ 実際の演奏曲順とは異なります。

執筆：道下 京子(音楽評論)

I. ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第23番「熱情」へ短調 Op.57 仲道 郁代 × 平野 昭(音楽評論家)

ベートーヴェン没後200年に向けて新たなシリーズをスタートさせる仲道郁代。ベートーヴェンのピアノ・ソナタを軸に展開してゆくシリーズ第1回を飾るのは、長い創作期間を経て完成した《ピアノ・ソナタ 第23番「熱情」》。ベートーヴェン研究の第一人者で音楽評論家の平野昭氏を迎え、「熱情」とその周辺について語り合った。



——「熱情」の創作背景

平野:「熱情」は、特別なソナタのように思えます。創作を始めたのは1804年頃からですが、出版は1807年2月。それまで、手直しをすべく手元に残していたわけです。それほど長い創作期間のピアノ・ソナタは、「熱情」以外にはありません。

仲道:なぜですか？

平野:「熱情」にかける特別な思いがあったのではないかと思います。へ短調の悲劇性にはエネルギーがあり、抵抗する

エネルギーと言いますか、改革するエネルギーを感じます。

仲道:抵抗するエネルギーは、とてもわかります。このソナタの構造を見ていると、第3楽章の最後に向かってエネルギーはずっと秘められています。爆発するようでいて、沸々と何か水面下で沸き立っているかのようなエネルギーという構図があります。

平野:もともと、ピアノ・ソナタの第1主題では上行進行が多いのですが、「熱情」の第1主題のように下行していくのはまれです。

平野:また、第1楽章の最初の方には「レレレード」という象徴的な動機がありますね。

仲道:《ピアノ協奏曲 第4番》にもあります。

平野:「ソソミー」の運命動機は1804年から出てくるので、「熱情」ソナタとほぼ同じ時期なのです。

仲道:その頃のベートーヴェンはなぜか「ソソミー」に執着しています。彼のなかには何があったのでしょうか。

平野:いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」が関係していると思います。このころのベートーヴェンは、フィナーレに重点を置き、一気に終楽章へ突き進んでいます。

仲道:第3楽章になると、下降していた三和音が「ドファラ」とがってゆき、「ドファラドレドシ…」とベルベトゥウム・モビレ(無窮動)的になってゆく。何かあらがえない、突き動かされるような人間の性…それに対して粛々と人は歩いてゆく、そういう概念がベルベトゥウム・モビレという運動性に表われているのだと思います。ハイリゲンシュタットの遺書以降に、その作風に至る彼の生活のなかで何かあったのでしょうか。

仲道:ベートーヴェンは、アン・デア・ウィーン劇場に住み、オペラ《フィデリオ》を完成させます。初演が行なわれた時期の

